

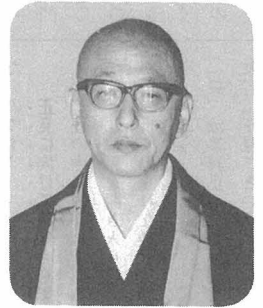
主 な 記 事

毒 語
宗教者の必読書
儀式の工夫—これからの法要
寺院と法律—文化観
光税について考える
旅と法友—訪印記

不 二

青年僧よ 立ちあがれ、歩め!!

発 行 所
臨 濟 宗 青 年 僧 の 会
発行人 宮 田 正 勝
〒420 静岡市御幸町11の4
TEL 0542-51-1312
〒振替 横浜 2-16960



▼ 混乱した現代、宗教の価値が問われています

三、四年前、イギリスの仏教会へ何度か行った或る時、ローマの方へ廻りまして、バチカンの「他の宗教と対話する局」から食事のお誘いを受けて、表敬訪問に参りました。この事をイギリスで話したら、彼等は驚いて、「昔だったら考えられないことだ。絶対に他の宗教とは交わらなかったのに」と言っていました。

カソリックからのアプローチ

その「他の宗教と対話する局」の局長バチカンでは大臣に当たる人、ピニエドリ枢機卿とお会いしました。本来なら法王にもなられる位の人で、それ位の實力者を置いて、他の宗教との対話を進めていたのです。「今日はお会いできて大変嬉しい。私はかねがね、禅」に非常に興味を持っていた。その関心とは、禅の布教の仕方ではない、失礼乍ら、我がカソリック教団は、全世界の宗派を通じて最も布教活動をしていると自負している。そして実際にカソリック立の学校や病院は、全世界に在り民衆への救済活動は昔からいかなる宗教にも負けない程やっている。しかし世界の政治的社会的情勢の変化に伴いカソリック立の学校や病院は次々に国公立に転換して減っている現状

である。だから、我々にとって今、最も関心あるのは、僧侶の宗教体験である。かつて、中世にはセントベネディクト等のように多くの人達が、禅宗の僧侶と同じように宗教体験を尊重した時代もあったが、それ以後、我々の宗教は極めて哲学的になって、いまや宗教体験の伝統は跡切れてしまった。我々の知る「禅」は、そういう宗教体験の伝統が、今日も脈々と続いている。だから、禅のお坊さんから、そういう体験に入っていく為の諸々の正しいやり方について学びたいのである」と、彼は話しました。

宗教の存在価値

私もかねがね、考えていた事ですが仏教に限らず宗教活動の中には教育・福祉・厚生・治療・或いはレジャーに関することまで多種多様なものが含まれていますが、その中の多くの部分は古い時代、政治行政が未発達な為に本来ならば政府が、あるいは地方自治体が担当すべき事

主 母 語 品

を、できないからお寺が代わりにしていただと思っています。今それらが全く必要でなくなつたのでなく、地域によつては顕然として必要な場合もあります。しかし、大きな一つの流れとして、今後、宗教が分担しなければならぬものは、即ち、宗教の存在価値が問われるものは、やはり、「宗教体験」ではなからうかと思うのです。そうなりますと、他宗教の、例えば

カソリックの羨望の的である「体験する修行の伝統」について、我々はどこまでしつかりやっているといるかという疑問が湧いてくるのですね。

先日、妙心寺教化センター運営についての諮問を受けた時、雑談の形で、「僧堂の在り様を改革しなければいけないのではない。僧堂へ行つて来た若い者は、僧堂で小生意気になることだけを覚えて帰って来る」という批評が、大部出ました。

僧堂の改革は必要か?

私は、西も東も分かん、仏教の勉強もしたことの無い状態で禅寺に入り、出家した者です。ですから、僧堂で十五年間も粥を食べさせて戴いたけれど、それが一体、釈尊の教えとどういう様に關つてゐるのかについては、僧堂生活中には調べることはできませんでしたが、授業寺に帰ってから、阿含經などを主に読み、二千六百年という歳月を経ながら、よく

京都 大珠院

盛永宗興老師

もこれだけ積尊在世當時を伝えたいのだと、自分の僧堂体験を有難く思いました。そして、非常に誇りと、幸運にも修行させて戴く縁があった事に感謝を持ちました。この自分の体験から言わせて戴くと、僧堂の在り様とかシステムがいけないのではなくて、そこへ入って来る人の素養そのものをこそ問題にしなければならぬ。僧堂の形式云々の前に、今、我々が

一番心掛けねばならないのは、失われてしまっている「難僧教育」ではなからうか。これは坊さんになる者だけでなく、日本の青少年全体に伝えることですが、敗戦後「国公立の学校で特定の宗教教育をしてはならない」として、宗教教育全てを否定してしまい、日本の青少年は宗教とは無縁になってしまった。本当は、宗教の百貨店であつて良いのに、一切なされず、道徳教育すらなされなかつた。従つて、素養というものが、土台になる宗教的情操というものが僧侶を問わず無いままに育つてきた現状であり、更に、学校教育というものが知育偏重で、その為の施設やシステムを充実しアツチ向いてる者をコッチ向かせ、覚える気の無い者にまで手とり足とりして覚えさせるのが良い先生良い教育だと考えています。翻つて、古来の教育理念を考えると一つの角を見せてやつて、直ぐに三つの角がぴりりと分かるのは、予めその問題に対して本人が苦勞しているからであり、それをせん奴には物言わん、というのが本来の教育であつた筈です。ですから、私の偏見かも知れませんが、「教養」という言葉は、「教育」と「修養」が重なつて出来たのだと思つています。教育というのは、外部から与えられるもの、修養というのは自発的に内部から勤めるもの。この二つが合わさつて始めて「教養」がで上がるものであり、若し、自分がヤル気がなくて教育だけ受けた者は、学歴は有るけれど教養はないことになりま

「更に、宗教的素養という、もう一つ下になる素地が無い。こういう状態で僧堂に入

るならば、たとえどの様な僧堂のシステムを作ろうが、どの様な師家や先輩の指導があるうが、これは、形しか覚えられず、所謂「宗教的体験」につながらず、いくとは思えない。若し、素地と教養というものが掛塔以前に有るならば、宗教的体験は僧堂に居る間だけの問題ではなくて、在錫年限が短かったとしても、その後のその方々の生活の中で、繰り返し繰り返し体験されていくのだらうと思います。

ですから、今後、宗教に、世間も期待し、又、宗教自身も息を吹き返す為に、布教化の前に、より根本的な問題として

お坊さん達の『宗教体験』それが悟りとかいう大袈裟なものでなくて、しみじみと仏様と親しくなったり、「お釈迦さま……」と口に出しただけで、もう胸が暖まってくるという様な、そういうものですね。それが、皆んなに出てくる為には、寺庭の教育、難僧教育、あるいは社会一般に対しての凡(全)仏教的な教育が不可欠です。

即ち関山一流の禅としての宗旨があるかないかといったような一人合点な布教でない凡宗教的なものを心がけねばならないのではないか。素地の有る人を専門道場に送り込む、あるいは僧侶の生活に送り込むことを本気で考えねばいかんのではないか。くりかえしますが僧堂のシステムの問題ではなくそこへ入ってゆく雲水の素地の問題だと私は思っているのです。

子曰不憤不啓
不悱不發
一隅不以三隅
反則不復也

(論語述而第七)

▼雲水の素地をつくる意味でも寺庭教育は重要であると思いますが、寺庭婦人の心構えについてお話し下さい。寺庭婦人というのは非常にお気の毒なんです。お寺以外からお嫁に来ておられるとしますと、何しろ、禅寺という所は掃除一つ取り上げて忙しいうです。ですから、寺庭婦人程、宗教書を読む時間はないんじゃないですか。却って、一般家庭婦人の方が、カルチャーセンターで聴いたり、テレビラジオで宗教について聴く時間が有ると思います。又、夫であるご住職さんが布教師さんだとすると、これは奥さん以外の人にはばかり話しているわけで、奥さんに言う暇がない。こうなると、この世の中で、自分の宗教に対して一番つんば枝敷に置かれているのが、寺庭婦人といえるのではないか。勿論、理屈は知らなくても、一瞬々々の事に打ち込んでやれば、それが仏様なんだけれども、しかし、やはり、自分の子供や檀信徒に相対していく時に、何となくボンやりしているのではなく、まだ駄目だけれど方向はこうだと確信を持ってもらいたいです。

正見に向けて確信をもて

法華經の中に説かれてある「二大事因縁は、仏智見を開き入らしめるのが、仏のこの世に出られた最大目的である」と。これを我々の宗祖の臨濟禪師は、「只、汝等真正の見解を要す」と言われ、「正見」ということを強調せられて

いる。世の中の常識、一般的な知識とは、正見に反して「邪見」に満ちている。よく世間の人は、「努力したのになんてこんなになつたんだろう」と嘆かれるが、努力だけで物は済まないことに気が付いていない。東京へ行こうとする人が、最初の一步を九州へ向けて踏み出したとするならば、後は努力すればする程、東京から遠ざかる。そこに、「正見」という最大の要素が必要とされるのです。

▼寺庭教育こそ大事ですね

布教の第一人者であられる松原泰道師は「南無の会」を作っておられますが、「南無」というのは「帰命」、「帰っていく所があることが、旅のよろこびだ」とよくお話しされます。「普通の旅行の喜びの原因は、安心して帰っていきける家庭があるからである。人生の過程の色々な出来事も、怖れとして受け取るか、喜びとして受け取るかは心の帰っていく家を持つているか、どうかにある」と上手に言われ、「南無」ということを理解させられるんですね。

寺にとって、南無の本拠地は「寺庭」なんです。その本拠地がいい加減になつておつて、難僧、僧堂、あるいは実際活動しているお坊さんの質の問題を論ずるのは、家の無い人間に旅のスケジュールを書いて、スケジュールによって苦しみを喜びに変えさせようというのと同じではないでしょうか。どの様なスケジュールであっても、帰って行く家の無い人にとっては、恐れ、寂しさ、苦しみになつてしまふと思うのです。

ですから、宗教界に「宗教体験」というものが強烈に問われてくるのは、当然

の時代の趨勢だと言えます。他に何をやっても、それは政治で、あるいは社会の慈善で代わり得るものになつてくるでしょう。そこで、宗教以外の立ち入ることのできないのが、本当の意味での「安心」の問題です。そして、それは一朝一夕にはできず、逆に綱をたどっていけば、寺庭の教育ということになつていく。在家から小僧に入つてくることの少なくなつてきた現在、又、今後より社会が豊かになつていけば、昔の様に、七、八才で寺へ入つて苦勞する人間など当然居なくなるわけですね。

ナウイ若者、宗教と関りがあるノ

これは、教団の使命を制する問題であつて、同時に、社会にとつても大きな問題です。私などは、西も東もわからないうちに坊さんになつただけに、自分が仏縁があつたことに、本当に、感謝しています。ですから、心底、若い者達に言います。「現代の若者で宗教と無関係な奴は、ナウクナイノ! 何々最も先端的にナウイ若者とは、宗教と関りのある人間だ」



▼仕方なく僧堂へ行つて、否応なく参禅もし、適当な時期で自坊に帰つて住職となった身では、世間の色々な問題に対応する力が無いと困っている人を見かけますが

これを解決する唯一の道は当人が本当に困ることだ、と思います。誤魔化さない事。器用に衣著て床の間に座らされてからといって、偉いところ見せる必要ないのです。在家の者が僧を尊ぶのは大切なことです。しかし、坊さんが尊ばれるには、どんな質問にも即座に答えられなければならないのか？いつでも教える態度でなければならないのか？私はそうは思いません。要は、他人の苦しみや、自分の分からないことに対して態度を落とさないこと、誤魔化さないことです。たとえば、妙心寺の愚堂和尚と同じ時代の太愚和尚という方は、葬式の時に婆さんから「本当に家の孫は成仏しましたか？何処へ行つたんですか？」と言われて、再行脚されたという有名な話がありますが、再行脚はしなくても、そういう質問に対して、本当に困ることが大切だと思うのです。口先で誤魔化さないこと。「僕には分からん。僕には分からんけれども、とも角、仏様の仰つたことを信じて、一所懸命お願いしたんじや。孫が可愛かつたら、僕と一緒に、二辺の所を三辺、三辺の所を五辺、手を合わそうや」と一緒に困ればいいと思います。それが、大変器用に誤魔化するのです。表面の皮が出来上がってしまったていて深く入っていないのです。現代人の一つの特徴に、ものを染み染みと感じることが無くなつてきて、それが坊

んの世界でも同じになつてしまつた。

宗教的体験というのは、色々深さがあると思います。白隠さんでも、大悟十八度、小悟はその数を知らず、と言うておられ、たとえば白隠さんの小悟の何十分の一であつたとしても、宗教的体験というのは、非常に深くしみじみと考えることが、先ず出発点だといえます。あの「花園」誌の太心院さんの編集後記には、素直な人間の情愛という、本来ある可き情愛として感ずる事が書いてあります。私の言う宗教体験とは、跳び上がったようなものでなく、徹底・素直な心で以つてものをしみじみと味わつていく姿勢が、先ず、坊さんにも寺庭にも、難僧教育にも欲しいのです。

妙恵上人の、「もののあわれ」というものを分らない者は、芸術をやろうが、何をやるうが大成しない。坊さんにとつても同じことだ」と、もののあわれを

その人の頭の中、意識の中にあるのであつて、一木一草に至るまで本物でないものは何も無い。だから、自分が本物の悟りを開いたかどうかを気にするよりも、自分の坐禅が、本当に日常生活を慶快にしたかどうかを気にして修行せよ、というのです。でないと、一言衆盲を引くという様な禅会が出来たりするのです。

日常が慶快になることこそ

「宗教体験」というのは、悟つたとか、見性したとかを後生大事に抱えて歩く宗教体験ではなくて、日々が本当に自分が慶快になる、仏縁が有つたお陰で、坐禅をしたお陰で、仏法を聴いたお陰で、自分の日常が時間的にも長く慶快である、ということなのです。この「慶快」とは泣いても笑つても、慶快ということなのです。

私の体験から、僧堂で修行を仕上げるという時期迄道場に居れる人は、その人の努力もありますが、大変運の良い人で

宗教体験の出発点は しみじみ味わう心に



強調されたのと同じことです。言葉は、数寄のころとありましたが、私はこう解釈しています。

▼ところで、日常生活で宗教体験を深めるにはどんな道が……

今迄に二人程、「お前は偽者だ」と、態々手紙で書いて来て呉れた人が居ます。然し偽者、というのは頭の中ではないんだ。一人として偽者はいない。偽者、本物として問題にしているのは、

ます。

▼大変有意義なお話を頂き、有難う御座居ました。現代社会で苦悩する青年僧に最後にお言葉を

老師だから、檀家のない寺でもやっていけると他人は仰有るが、私だって、それまでがあつたんです。あるいは、老師は力があるからとも仰有る。「力」って何ですか、若し力があるとすれば、始めの一年か二年、歯喰いしばつて、じつと寺に居たことです。今は、講演だ、提唱だと呼ばれてお包みも頂けますが、そうなるまで三、五年はあつたんです。兎に角、いつも寺に居れば人が来ます。行けば必ず居るから。そして、私の生活見れば、次に来る時は何か持つてきてくれます。

和尚の力量というのは、たとえば老師が十で、僧堂へもろくに行かなかつた坊さんが一だとしても、その差の九ではないと思います。どちらにも釈尊以来の祖師方の功德が土台に入つていて、老師と普通の坊さんの差なんてのは、土台がこんなに巨大なものですから、ほんのちよつとのことなんです。私は、心底、そう思っています。寺なんて、釈尊以来の仏法が被さつていなければ誰がこんなにして呉れますか。

たとえば、檀家が少なくても、一般民衆の心の中にある仏教というものは、口では粗末なこと言つてますが、抜き様のないものが入つてます。お陰様で生きていくということは皆同じです。そのお陰様を「自分の我」でぶち砕すから、「我」さえとれば、正見ができて、色んな恵まれている有難さがよく分かつて言うのです。